

身邊小吟

石川國武

幾重にも垂れ暗みたる大空の雲をし裂きて光射り來も

兎皮を裂く切出の尖のきびしさにおどおどと腸の生きてありける
たゝかひの銃後しゅうごにありてたしかなる足踏あしふみをきけばやすらふごとし
けをされし心をもちてこがらしの風吹く街をさすらひにけり

兵ならぬ吾だに召されむときありとひそかに念ひなぐさむるなり
力盡きて死せる馬なりねもごろに弔ひつつも火をつけにける
夕風ゆふかぜの水面みづおもに映るひとすじの炎となりて消え果てにけり

昭和十六年十二月八日宣戰の大詔くだる

忍びきて遂に宣らせし大君の大御心にふれてなきたる

皇祖すめみまの御靈みたま上に在りと宣らしつつすめらみことか民はけましむ
新らしき世を打ちたてむ力なればつぎつぎ屠るそのいさぎよさ